

大齋節第4主日

2011/4/3

聖ヨハネによる福音書第9章1～13節、28～38節

於：聖パウロ教会 司祭 山口千寿

赤座憲久という方をご存知でしょうか。聖公会の方のようです。1929年生まれと言いますから、ご健在なら81、2歳になっておられると思います。この方は、戦後、小学校の教員となり、その後、教員としては出世コースから外れた岐阜盲学校の教師を自ら志願して、1954年から17年間、勤めた方です。

この岐阜盲学校は、日本で8番目に作られた盲学校です。設立者は、森巻耳という聖公会の伝道師であった方です。ご子息の巻吉さんやお孫さんたちが、この聖パウロ教会の信徒でしたから、お名前をお聞きになったことがあるかもしれません。

森巻耳さんは、岐阜中学校の英語の教師でしたが、原因不明の眼病で視力が衰え、明治21年に職を辞さなければなりませんでした。それ以前から熱心に求道をしていましたが、学校を退職した年にCMSの宣教師のチャペル司祭から洗礼を受け、熱烈に伝道活動に当たりました。明治24年に濃尾大地震が起こり、今回同様、大変な惨状の中、聖公会の信徒は多くの罹災者の救援に力を注ぎ、中でも盲人の被災者の援助を行いました。

その後、明治26年に森巻耳さんは両眼とも完全に失明してしまいましたが、それを「これ皆神の聖旨なり、吾を盲人社会に用いて神の栄を表さしむるなり」と受け止めて、残る生涯を盲人の教育に捧げようと決意しました。そして、チャペル司祭と協力して「岐阜聖公会訓盲院」を設立して院長となり、教育の実務を担当することになりました。

森院長、そして2代目の小坂井桂次郎校長時代にも、「失明を因縁とか、運命として諦めるのではなくて、摂理として、つまり聖書にある『彼の盲なるは神の栄光をあらわさんがためなり』という積極的な失明感にたって、一貫した祈りと愛の中に、盲人が人間として生きて行く道を、さし示してきた」ということです(『目の見えぬ子ら』)。

1940年になって、盲学校は県立に移管され、岐阜盲学校となりました。赤座憲久さんは希望に燃えてこの学校に転任してきました。赤座さんが何故、教師を目指したのか分かりませんが、岐阜の師範学校に在学中は、学徒動員で勤労奉仕をさせ

られたり、戦争末期には軍隊生活も経験しました。復員して学校に帰って来たら、戦争中は大真面目で「惟神(かんながら)の道」を説いていた教官が、手のひらを返したように民主主義者面をしていたということです。

そのような中で、人間の生きて行く真実の方向付けをしてくれた先輩に出会うことができ、心を揺すぶられ、教師の道に改めて進むことになりました。その先輩は、野村芳兵衛と言って、師範学校の付属小学校の校長として岐阜に戻ってこられた方です。生活綴り方運動を池袋で実践し、その上に立った教育理論を講義してくれました。民主主義を信念とし、戦時中は特高の訪問を受けながらも、節を曲げることなく生き抜いてこられました。赤座さんは、その方の影響を深く受けました。軍国主義一色の教育を受けて来て、人間として考えたり行動することを知らなかったわけですから、野村芳兵衛の説くところは、赤座さんの心に深く染み透っていきました。

赤座憲久さんは、岐阜盲学校でのご自分の教育の実践をまとめ、1961年に『目の見えぬ子ら——点字の作文をそだてる』という本を出版しました。この本の内容は、入学前に視力障碍の子どもがいると聞くと、盲学校への入学を保護者に勧めるところから始まります。戦後、まだ間もないころの話ですが、盲学校の教育に対する無理解やら、不幸な子どもに対する溺愛から、或いは経済的な理由から、入学願書に判を押してもらうまでに、何度も足を運ばなければならないこともしばしばあったわけです。

1年生が入学して来ればして来たで、基本的な生活習慣が全くなってい黠のできていない子どもに、トイレの使い方を教え、知的障碍のある子どもには、盲学校は教育の場か、それ以前の場かと、分かりきった問を問いながら、寮母さんと悪戦苦闘の毎日を送らねばなりませんでした。

しかし、そのような生活の中でも、赤座さんは目の見えない子どもたちから沢山のことを学びます。この本の中には、赤座さんの生徒たちが点字で書いた作文や詩が沢山紹介されています。作文の指導を通して、子どもたちの生活を豊かなものにして来たのだと思います。

そのいくつかが、『雨のにおい星のこえ』という絵本になっています。子どもの詩とそれを紹介する赤座さんの文に、鈴木義治が絵をつけています。「(題)どしゃぶり (詩)雨が ふってきた 土くさい 土くさい どしゃぶりだ (解説)うまれながらの目のみえないマシオが、四年生のとき書いた詩です。かわききっていた運動場に夕

立がきたときでした」。夕立を嗅覚で捕らえています。目の見えるものは、それに気づかないでいることが多いのです。夕立の情景が見える範囲だけに限定してしまうのです。

もう一つ。「(題)星 (詩)星はキラキラ光っているとみんながいう ぼくは星を知らない

でもなんだか 猫のなき声みたいな気がする (解説)アキオが 四年生のとき書いた詩です。アキオは 空のひろさも 星のかがやきも まったくわかりません。それでも 星のかがやきを アキオらしく ネコのなき声におきかえました。ネコのなき声は、はてしない宇宙へと かぎりなくひろがります」。目の見えない子どもたちは、見なければ掴めない観念を音に置き換え、嗅覚や触覚に置き換えて、自分のものにしようとしていることを、赤座さんはこれらの詩によって知るのである。目の見えない世界を、我々めあきは不完全な世界と決めつけてはいないでしょうか。閉ざされた世界と誤解してはいないでしょうか。

しかし、目が見えないということは、大きなハンディを抱えていることには間違いない。そのため、学校と校舎に併設されている宿舎だけの生活だけではなく、社会に出て行っていろいろな体験をする機会を作ることを試みます。遠足に行ったり、6年次には京都と奈良へ修学旅行へも連れて行っています。清水寺では、「遠くの方から吹いてくるような風が、顔にあたって、高い所にいるのだなということが分かった」と清水の舞台を体験しています。その他にも、バスガイドさんに手を引いてもらって歩いたら、ガイドさんが網のような手袋をしているので、不思議に思うのです。手袋は寒い時か野良仕事の時にするものだとばかり思っていたからです。新しい経験が、学校の外には沢山あるのです。

白い杖を持った子どもたちの群れが外を歩くと、どうしても目立ちます。ある時にはこのようなこともありました。「幼児の手を引いた中年の婦人は、しみじみとその子に訓辞を垂れました。『よく見ておきなさいよ。ごはんのとき、行儀がわるくて、ごはんつぶをおとすと、バチがあたって、あのよう目が見えんようになるんだよ。』つれだって歩いている子どもたちの耳に入れないように、わたしは大きな声で、なんでもない話題を持ち出さねばなりません。盲児に聞かせたくないだけでなく、ごはんつぶをこぼすと失明するのだと言いきかすことが、しつけとはいえわが子を脅迫する間違っ手段であることに気づいてもらいたい。とにかく、通俗仏教の

低劣な因果思想が、多くの日本の人々の頭の中へしみこんでいます。」そう書いています。

今から50数年前の話だと言って片付けてしまえるほど、今日の日本人の障害者に対する見方や理解が、格段と進んで来ているのであれば幸いだと思います。この度の大地震に際して、「日本人の我欲に対する天罰だ」と都知事が発言したと伝えられていますが、翌日、撤回したとは言え、被災者の心を深く傷つける発言だったと思います。この発言にも、因果応報の思想が現れていると思います。世の中の矛盾や人生の不条理な出来事が起こった時に、それをどのように理解したら納得がいくようになるのでしょうか。

今日の福音書では、生まれながらの盲人を見かけて、弟子たちが「これは誰の罪ですか」とイエスさまに尋ねています。人間の幸せや不幸を、その人の罪や過去の行為の善悪と結びつけて説明し、納得しようとする、第三者の立場からの質問です。

それに対して、イエスさまは因果応報の考え方を、弟子たちへの答の中で、明らかに否定しました。イエスさまの答は、「神の業がこの人に現れるためである」という、この人の人生を積極的に肯定するものでした。神さまのみ業というのは、人々や社会が、その価値を低く値踏みして、または、その価値を否定して、社会の中から除け者にし排除しようとする人々、或いは、せいぜいお情けで社会の片隅に生きることを許している、そのような人々を片隅から中心に呼び出して、光の中に立たせるということです。否定されていた者の存在を、積極的に肯定するということです。

この人が癒されたのは、この人にイエスさまを救い主と信じる信仰があったからではありません。この人が、「主よ、信じます」と信仰の告白をしたのは、今日の福音書の一番終わりになってからのことです。癒されたときには、信仰があるかないかは、問題にされていません。この人が癒されたのは、ただ、父なる神さまから遣わされた方が、神さまのみ業をなさったからです。世の光である方が、その光の中にこの人を招いたからです。

このような神さまのみ業を見ることが、信仰です。神さまのみ業に目が開かれることが、信仰です。様々な問題を抱え、苦労や困難の内であって、納得がいかず、解決がつかず、辛くて悲しい思いの中にあるわたしたちを、そのような闇の中にあるわたしたちを、招いてくださる方の招きに応じて、光の中に立つことです。神さま

が、わたしたち一人一人の存在を「然り」と言ってくださる。Yesと言ってくださる。「お前はお前だ」と言って肯定してくださる。そのお恵みの中に立つのです。

この人が癒された後に、周囲の人たちは、これがあの物乞いをしていた男だ、いや違う、似ているだけだと言いました。そのときに、「わたしがそうなのです」と堂々と人々に言えるようになりました。すっかり変わりました。「わたしがそれだ」という言葉は、「わたしは、わたしとしてあるのだ」という宣言です。赤座憲久さんの働きは、目が見えないために虐められ、蔑まれていた子どもたちに、わたしはわたしとしていきっていくのだ、という自信を生み出す産婆役を果たしたのではないのでしょうか。それによって神さまのみ業が現れるよう奉仕したのではないのでしょうか。

たとえ、自分を取り巻く闇がどんなに深いように見えても、そこで「あなたは、あなたとしてあるのだ」という神さまの恵みのみ言葉を聞き、そのみ言葉に従って、わたしはわたしとして生きてよいのだ、ということに気付くことが、信仰の出発点です。

神さまが、わたしたち一人一人のことを受け入れてくださるということに、気付くことです。だから、自分も自分のことを受け入れて、「わたしはわたしだ」ということに感謝ができるようになること、それが信仰です。そこに神さまのみ業が現れているのです。

イエスさまが明らかにして下さった信仰の道を、わたしたちも感謝の内に、辿って参りましょう。